

和田傳全集

第六卷

和田傳全集 第6卷

定価 2,800 円

昭和五十三年八月二十五日 発行

著 者 和 田 傳

発 行 者 高 橋 芳 郎

〒 162

東京都新宿区市谷船河原町十一

発 行 所 法 人 家 の 光 協 会

電 話 (260) 三 一 五 一 (大代表)

振 替 東 京 5 1 4 7 2 4

印 刷 三 松 堂 印 刷 株 式 会 社
製 本 寿 製 本 株 式 会 社

和田傳全集 第六卷

和田傳全集（第六卷） 目次

名主源之丞行狀

検死帳

罪業

まぐさ場

螢飯

街道

貞女の碑

家出人

御巡視

深い穴

怒る老農

藁屋根の下

5

5

28

52

73

94

116

136

158

180

202

223

はらから	239
むらのそと	258
追い風	281
涙と汗	316
屋根屋再興	324
早めし	343
空洞	348
絹の禪	353
藪の中	365
舅姑	385
解説	

装幀

舟橋菊男

題字

久住和代

名主源之丞行状

検死帳

一

そのは下女にも手伝わせずひとりで縫いあげた。まだ見ぬ娘に、娘となるべきおなごに着せるための着物である。と言って、それは晴れ着ではない。浅黄地に朱の麻の葉模様をおいた地味な道中着であつた。

——できましたわ……どうでしょう？……似合いますかしら……。

夫の源之丞の前で、そのはそれを肩からかけて見せながら、

——やはり江戸のものはちがいますね。

江戸でも、赤坂や渋谷道玄坂界隈のものではない。代官所のある日本橋の本店で購^{もと}めたものだ。

風が書院の簾をまくって吹きこみ、机上の書類を飛ばした。源之丞はあわててそれをおさえ、まくられた簾の隙間から空を見あげる。秋立つ清涼の風ではなかった。二百十日の間近さを思わせるみだれた雲行きである。

——お天気が変わるのかな……。

——荒れるのではないでしょうか？……。

初老の夫婦は縁側に出て並び立ち、空を見あげる。雲足は乱れて急であるが、きょうあす荒れるとも思われな
い。

——吹かしたくないな……。

隠居屋の裾の街道の向こうは田圃で、色づいた稲がはるばると遠い。どうやら今年は豊年らしいが、秋の嵐で
どうなるやもはかり難い。

——こんなでもおたちになりますか？

——延ばすわけにゃいかな。

あすは江戸行きである。名主として江戸行きはたびたびのことでも、そのにとつては今度はいつもと違う。源
之丞の不在の間に、そのまだ見ぬ娘、娘となるべきそのおなごが、この麻の葉の道中着姿でたずねてくること
なるのである。

表向きは大山詣り。その道中、さりげなく立ち寄るという寸法である。源之丞には実の子でも、そのにはアカ
の他人であるそのおなごを、娘として引き取ることにくめたと言っても、さりげなく会ってみた上ということ
にしたのは、源之丞の妻への心づかいからだ。しかし、いまはそのも、会ってみてそれを拒む気になろうとは思
われない。ひとり息子しか持たぬ彼女は、やはり女の子ひとりを持つてみたいのだ。

息子の源蔵も妻を迎え、名主見習としていっぱしやってゆけるのを見とどけて隠居したのはこの春だが、二人
の暮らしもしずか過ぎる上に、源之丞は不在が多いのであった。

妾の子と言っても、その妾も、女狂いと言うのでも何でもなし。利財の道に長けた源之丞の謂わばそろばんず
くの仕業であった。名主として江戸行きは頻繁で、江戸へは十三里、未明に家をたつて灯ともし頃に渋谷道玄坂

に着く。そこで定宿をとるが、江戸滞在中はそこが宿だ。他村をしのいで自村の利をはかろうとすれば滞在は長びく上に、代官をはじめ手代連を相手の饗応はいつものことで、これは日本橋界隈の料亭ですることだから、やさしい費用ではない。

道玄坂の定宿の女中をひかせて、半蔵門の前に妾宅をもったと言っても、そこではたご屋を営ませたのは、そこは大山街道と甲州街道が落ち合うところで、また、日本橋からもさほど遠くないからであった。源之丞はそこを定宿として滞在の長びく憂いをなくし、役所の連中の饗応の場としたのであった。

源之丞の設計は図に当たり、妾宅ははたご屋として繁昌したが、その女に産ました娘が、いまは十七歳になって、数日の後にはそのの前にあらわれることになる。

乱れて速い雲の間からは青空も見える。荒れるのか、持ちなおすのか、見当がつかない。

——荒れるんでしょうかな……こんなでもおたちですか？

源蔵が柴折り戸を押して庭へ入ってきた。空模様を見あげ、気にかかる風である。

——あすというでもあるまい。

——このところ二百十日の無事がつづきましたから、今年あたりはあぶないもんだ。……水が出たら、今度は抜かりなくやつつけますぜ。

——うむ、水が出たら抜かるな。

源之丞は笑い出し、その二十六歳の名主見習の気負い立ったみずみずしい顔に投げた眼は愛撫に湿っていた。

——常右衛門と時次郎がやってきましたよ。

——そのことか？

——もちろん……。

——気の早い奴だ……。

——お会いになりますか？

——会わん方がいい。いいようにやれ。

組頭の常右衛門と時次郎も荒れると見てとったかと、源之丞はもういちど空を見あげた。そう言えば荒れるかも知れぬ……。

そのは縁側に背を向けて着物を庇い、手早くたたんでしまった。源蔵にはまだ話してないからだ。軽率と思われたくないから、それはおなごと会って心がぎまった上でうちあけることに相談ができている。おなごにはそれとなく源蔵にも引き合わせるつもりだが、それまでは伏せておきたい。

源蔵が母屋へ引き返して行くと、

——源蔵は、橋を、やるつもりなんですネ。

——やるだろう。

源之丞は満足そうににたりと笑うが、そのには気がかりなことであった。

——大丈夫でしょうか……。

——心配するな。元気なところを見せるだろう。

——でも、南原と事でも起こすと……。

源之丞が指図らしい指図も与えないのが、そのには気がかりでならぬ。

——よけいな心配はするな。まかせておけばいいんだ。留守中、お前もよけいな世話は焼くな。……南原なぞ

気にかけるな。

源之丞は満足そうな眼をこんどは娘の道中着に向けた。

二

あくる日の未明源之丞は供の佐助をつれて出立して行ったが、空は依然、荒れるのかおさまるのか見当もつかなかった。ところが、夕刻になって荒れ出した。夜になって佐助が帰ってきたころは豪雨になっていた。佐助は溝ノ口まで供をし、渡船が六郷川（多摩川）の向こう岸へつくのを見とどけてから帰ってくるのがいつもの慣わしである。

——荒れますね、六郷も馬入（相模川）も、川筋では仕度をはじめました。……あすは川止めになりました。
と、油合羽をぬきながら佐助は言った。

言う間もなく益々降りつのる気配で、雨樋に吞みきれぬ水は滝のように落ちかかってきた。

——佐助も吉兵衛も今夜は早く寝ろ。

源蔵は二人の下男を追いやるように部屋へ下がらせ、自分も奥の寢所へ入ったが、閉め切った寢所では、妻の辰江が、はや仕度をととのえ終わっていた。火事装束の刺し子、油紙を縫いつけた頭巾、下袴、脚絆と、装束はすっかり揃っていた。

——早いところひと寝入りだ。お前も寝ろ。
と、源蔵はすぐに寢床に入った。

——ほんとに、今夜、落とすんですか？

——落とすとも……お前もひと寝入りしろよ。あとが忙しいぞ。

辰江もすなおに寝巻きになって枕を並べた。

——大丈夫なんですか……橋を落とすなんて、あたしはじめて聞きます。

——橋のない村の名主にゃわかるまい。

——でも、橋のある村でもみんなそんなことするんじゃないでしょう？

源蔵が笑い出した。それはその通りだろう。この高萩川にもいくつ橋があるか知らないが、手にかけて橋を落とすという奴も少なからう。

——ねえ、わけなく落ちはしないのでしょうか？

——わけないさ。

——でも、あなたははじめてなのでしょう？

——たびたびあることじゃないさ。……寝ろよ。常と時が子の刻に戸を敲くまで……。

高萩川に架かった村の橋、中里橋、もはや結構朽ちはじめている。早晚架け替えの時期となるが、それは村持ち、村費用でやらなければならず、やさしい負担ではないのである。しかし、出水による流失ともなればお上普請となるのだ。だから出水ともなればその流失を願うと言っても、そうは問屋がおろさない。それを、増水と見れば手にかけて落としたのは源之丞が初めて、それ以前にはなかったことだ。いままこの中里村のほかにもそれをする村はあるまい。代官所の普請方の眼も節穴ではないからだ。

大戸を敲く音に浅い眠りから醒めて源蔵が跳ね起きると、常右衛門と時次郎が先に入ってきた。つづいて七、八人、みな揃いの火事装束で、はやずぶ濡れだ。

——^{はな}栢についたか？

——まだですが、そろそろやつつけてもいいでしょう。ぐんぐん増えますから……。

と、常右衛門が言った。ふだんは間が抜けたような野川でも、上流一里からは山方になる高萩川は、山々丘々の雨水を集めて荒れ足が速いのだ。

——南原橋はどうだ……南原の奴らに真似でもされると困るな。

——南原の腰抜けは出て来ませんよ。大丈夫でしょう。

——大丈夫なことあるものか。見様見真似でやるかも知れない。

——大丈夫ですよ。そんな骨のある奴が南原に一人でもいますかい。

と、時次郎が一笑に付したが、源蔵には気がかりで、

——落とされちゃってからじゃ間に合わねえぞ。

下流の隣村南原にも橋があるが、もしもそいつが落とされでもするとまずいことになる。落とさずとも、流されたのも困る。と言うのは、昔のことだが、この中里橋と南原橋が同時に流されたことがあった。それは当然お上普請となるべきであったところ、代官所では財政窮迫を理由に、双方はならぬとして、両村とも村普請を押しつけられたことがある。それが例となり、流失によるお上普請は一橋に限るということにさだめられたのも、二千石の旗本領のことだから事がみみっちいのであった。

それは昔のことで、源蔵には祖父の時代の話だが、父子相伝の知識である。領内に橋はこの二橋だから、源之丞も橋を落とすにあたっては下流の南原橋には警戒をゆるめることがなかった。われは落とし、人には落とさせぬ警戒である。

——おやじが留守なのは南原にも知れてるだろう。

そう言われればそうにちがいない。留守をあずかるこの若い名主見習の心意気のほどが常右衛門にも時次郎にもわかって、その弱小の隣村などあいた眼では見ていないが、

——じゃあ、見張りを出しましょうか……。

——おれが出る。お前ら二人も出る。三人でいいだろう。

辰江が台所で薦被りの呑み口をひねる音に、みんながぞろぞろその方へ行く間に、源蔵は装束を固めて土間へ下り、草鞋をはいた。

——もしも南原で出て来たらどうなるでしょう？

辰江がきいている。

——南原の腰抜けどもが出て来たらおなぐさみでさ。

常右衛門が薦被りの前にへばりついているらしい。みんな枡であおっている。

その勢いで豪雨のなかへ飛び出し、土蔵からカグラ棧や麻綱など道具一式持ち出して猫車につけて曳き出した。

村の裏手の高萩川の中里橋は、村道に架かった全長十間ほどの木橋で、費用を惜しむからろくな橋ではない。

水は橋桁にはまだ届かないが、それは時間の問題だと思われた。

杭を打ち込んでカグラ棧を据え、橋をモロに結わえた麻綱をカグラ棧にかけて総がかりで廻すと、音もたてず
にヤワな橋は濁流のなかに落ちた。

たばこ休み一服の間であった。そして手早く道具類を車におさめて一同が引き揚げたあとに、源蔵は常右衛門
と時次郎をつけて居残った。

——夜明けまでには結構流されましょう。

そんな具合に橋は引ッかかっている。

源蔵は下流の南原橋へ急いだ。それも村道に架かったヤワな木橋で、その方が古いのだが、曲がりくねった川だから水勢は場所によって違う。

——へ、出て来たらおなぐさみでさ。

常右衛門は橋の上に立って、向こう岸の集落をうかがっているが、そのような気配もない。

——若旦那、大丈夫ですよ。……引き揚げましょうや。

——カグラ棧ひとつ、気のきいた綱一本ありやしめえ。

時次郎も飲み継ぎたそうな顔つきである。

南原村をあいだ眼で見ないのは、弱小の貧村だからで、昔は名主も立てられず、源之丞の先代までは中里名主が兼務していたほどの村だ。いまの名主が初代だが、年寄りながら知らぬことが多く、事ごとに中里にコミやられてきた。中里では組頭や百姓代までがコミやることを当然と心得ている。

——じゃあお前ら帰れ、おれは夜明けまでいる。

源蔵はその場を動かこうとしない。気負い立つもほどほどでよからうにと二人は思うが、留守をあずかる身だともまた思いなおし、降りしきる豪雨を杉の木立によけて立ちつくした。

三

夜が黎しらむまでその場を離れなかったが、南原の名主が組頭をつれて出てきたころには、中里では村民総出の川

除け姿で堤を上流から下ってきていた。

簑笠姿に鳶口をかいこみ、百人を超える総勢が、百姓代の指揮でいくつかの群れをなして堤を下ってくる。溢れてはいるが堤を破るほどの水勢ではないので、存外呑気そうにわめきながらやってくるのは、川除けと言うよりは南原への示威である。事ごとにそんな示威をやって隣の小村を圧するのがこの村のお家の芸だ。

村境は川でなく、対岸も村内だが、橋が落ちているので、南原橋を渡って対岸へ出るために下って来るのである。

南原の名主徳兵衛が簑笠姿で組頭二人を従えて出てきたのを橋の上で源蔵が迎えた。

——橋が無事で何よりでした。……わしの方は流されましたよ。

——それはご災難でした。……流されましたか。

そんな挨拶をしなければならぬのも徳兵衛には腹に据えかねるが、

——流れてきてこれにぶっつけては事ですからね、でもいいあんばいに途中でひっかかっていますよ。

と、源蔵が白い歯を見せて笑うのに、盗ッ人猛々しいと芯が煮えながら、

——それはそれは痛み入ります。

と、徳兵衛は笠をぬいだ。

長居は無用と源蔵はさっさと堤をさかのぼった。村民は南原橋を渡って対岸に廻り、これもさかのぼって村へもどる。帰れば一パイやれるから結構な出役で、えらい騒ぎだ。

——中里橋が流されるわけがねえ……そんなわけがねえ……。

橋の上に突ッ立って組頭の重右衛門が舌を鳴らすのに、徳兵衛は返辞もしない。村の方に催促げな眼をやるが、